



利根山光人

Toneyama Kojin

第88号 平成27年10月1日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

『遺したい北上の風景画』



私の散歩道

いつも散歩している運動公園の周りは様々な木に囲まれ、とても空気を美味しく感じられます。小鳥たちの声も和ませてくれ、又、風と光が湖水を揺らし逆さ富士のような景色で素晴らしい環境です。運動場からは国体の練習でしょうか、中高校生の甲高い応援の声が聞こえて楽しく、つい私も応援したくなりました。

さて、私達は絵画教室第18回生。初めての油絵でどの様に描けばよいのか戸惑っておりましたら、先生には自由に優しく、絵の歴史を交えながら遠近法などを教えて頂き感謝しております。又、他の受講生の方々の絵を描く工程をみていると素晴らしく、とても励まされ、私も少しずつ近づけたらいいと思います。

柴田レイさん
(利根山光人記念美術館光の会)



北国の祈り (おしらさま)

—利根山光人記念大賞展ビエンナーレ・きたかみ大賞作品—

利根山光人記念美術館企画展開催中 「川杉雅江展 ー北国の祈りー」

平成27年8月29日(土)～11月30日(月)

川杉雅江氏は北上市出身で、中央美術協会による「中美展」で五十周年記念賞や「安田火災美術財団奨励賞展」特別賞、「水彩連盟展」水彩連盟賞など多数の受賞歴があります。平成18年には「利根山光人記念大賞展ビエンナーレ・きたかみ」大賞を受賞しました。

今回の企画展では、大賞受賞作品のほか、「北国」や「花」をテーマとして描き続けた水彩画作品を展示します。北国や花への想いあふれる、静かで、そして躍動的な作品の数々をぜひご覧ください。

〈利根山光人画伯のエピソード〉

画伯の主たるアトリエは東京世田谷にあって、アルテ・トネヤマはその一部となっている。コンクリートの利根山邸の二階にあり頑丈な鉄の扉を開け入り、そして木製の大きな扉を二か所開けた先にある。その奥まったアトリエの窓からは樹木が間近にせまり都会では珍しい野鳥がやってくる。制作に集中するには最適といえる。

「元旦も朝のうちはいっしょに食事などしていても午後にはアトリエの中に入っていた。」と、彌恵子夫人が以前話されていた。



現在のアトリエの一部

トウハラ ヒトシ
東原 均 (画家 アルテ・トネヤマ講師)

利根山光人画伯、彌恵子夫人が主催するARTETONEYAMA音楽絵画研究所に1984年より参加。現在に至る。

11月『利根山光人作品展』開催



ドン・キホーテ

来年の美術館開館20周年に向け、より多くの方に画伯の作品を気軽に鑑賞してもらうため、11月に相去地区交流センターと江釣子地区交流センターの2会場で「利根山光人作品展」の開催を予定しています。ぜひこの機会にお楽しみください。

詳しい日時については、北上市のホームページでお知らせしますのでそちらをご確認ください。

—北上市ホームページ—

<http://www.city.kitakami.iwate.jp/>

『美術館の楽しさ』 その6

美術館消灯後、薄暗がりの状態で作品に接すると全く違う絵に見えることがある。

大作「日輪」は、太陽の画家と称されるように、画面は太陽の輝く朱色で染められて居る。薄暗がりの中では、鹿は動きを止め息を潜め、天空を仰ぎ臉を閉じている。メキシコでは焼畑農業を営む貧しい農民と生活を共にした。雨が降らない日照りがどれ程過酷な結果をもたらすかは肌で知っていた。「雨神チャック」をモチーフにした作品も沢山残して居る。宮澤賢治の「日照りのときはなみだを流し」の一節もそらんじていたのであろう。活力に溢れ快活な絵が、悲痛な祈り、雨乞の絵に見えるのは私の独善的な感覚故だろうか。

高木 俊士

(利根山光人記念美術館専任研究員)



高木 俊士 画



メキシコのお土産

＝美術館・展示会巡り＝番外編



モレ・シュル・ロワン
高橋 平光 画

パリ旅行の思い出3

モレ・シュル・ロワン (シスレーの住んでいた) 町

バルビゾン村から「次はどこへ行こうか」と話していたら、妻が「シスレーは知っているか？」と聞いてきた。画家のシスレーを知ったのは小学生の時だったと思う。印象派のモネ、ピサロと名前が連なっており、筆のタッチあるいは色の使い方が似ているが、私はその中でも何故かシスレーが好きだったと思い出す。今考えてみると、題材よりも色が好きだったのだと思う。

そのシスレーが晩年を過ごしたモレ・シュル・ロワンという町が近くだという。案内人の話だとシスレーはイギリス人とのこと。彼が何故この地に來たのか？疑問に思ったが、その町に行くことにした。

そこはまるで絵のような城の門があり、セーヌ河の支流でこじんまりとした静かな町だった。川の流れの音と古い建物に、何か時間が止まった空気のようなものを感じた。

印象派の中でも私の好きなシスレーの絵と、彼が住んでいた町の雰囲気繋がったような気がした。この町を見ることが出来て幸運だと思った。

高橋 平光

(利根山光人記念美術館専任研究員)